

打牙伧佬における欠歯の風習について*

戸 出 一 郎**

中国本土における欠歯の事例については、三宅宗悦¹⁾、金関丈夫と宮内悦蔵^{2)3~6)}、及び顔閻⁷⁾の4氏の報告がある。しかしこれらの報告における事例は殆ど古代の頭骨に見られるもので、それが如何なる民族に属するかは明らかでない。

文献によれば、中国には古代から西南方の民族に欠歯の風習があったことは明らかである。中でも近代まで欠歯の風習を持っていた民族は伧佬族の中の打牙伧佬 De Ya Keh Lao と呼ばれる部族である。

伧佬の名が最初に表れる文献は宋の朱輔の溪蛮叢笑⁸⁾である。この書物は所謂五溪蛮即ち苗、侗、僚、僮、伧佬の風俗を記載しているが、そのうち伧佬については16條の習俗を述べている。その中に

筒環狔猪妻女年十五六敲去右邊上一齒以竹圍五寸長三寸裏錫穿之兩耳名筒環とある。

打牙伧佬の名が表れるのは、明の田汝成の炎徼紀聞⁹⁾からである。

在平伐者為打牙狔猪標悍尤甚善斂百物之毒以染箭刃當人立死觸其氣者亦死父母死則子婦各折其二齒投之棺中云以贈永訣也

炎徼紀聞では伧佬を五種に分ち、それぞれ花伧佬、紅伧佬、打牙伧佬、剪頭伧佬、猪屎伧佬と称している。

清代以後になると打牙伧佬の名は屢々文献に表れるようになるが、諸文献によれば打牙伧佬が伧佬の1部族であることは疑いない。では伧佬は一体どこから由来した民族であろうか。

芮逸夫¹⁰⁾並に Beauclair¹¹⁾によれば伧佬は僚の

子孫である。

晉、張華 (AD 230~300) の博物志¹²⁾、卷二、異俗の條に

荊州極西南界至蜀諸民曰獠子婦人妊娠七月而產臨水生兒便置水中浮則取養之沈使棄之然千百多浮既長皆拔去上齒牙各一以為身飾

とある。西晉の頃の荊州は今の湖北省、湖南省の地に当り、その極西南界は湖南省常德、邵陽に当る。それから更に蜀に至る地といえ、当時の梁州の南、荊州の極西南界及び益州の中南部を含む地域であり、現在の川南、滇東、貴州全省及至湘西にわたる地方である。張華によれば当時この地方に住む人々は僚と呼ばれていた。

晉、常璩の華陽国志¹³⁾、北魏、酈道元の水経注¹⁴⁾、晉書¹⁵⁾、魏書¹⁶⁾等によれば、蜀に居た僚人は成漢 (AD 304~347) の頃、牂牁より北上して遷入して来たもので、もともと僚人は牂牁郡或は夜郎国の主要属民であったといわれる。史記、漢書によれば、牂牁はもと夜郎国の地で春秋時代の初めには既に建国されていた。

更に魏書¹⁶⁾、北史¹⁷⁾、通典¹⁸⁾、桂海虞衡志¹⁹⁾、太平御覽²⁰⁾等によれば、牂牁は春秋時代の初め、BC 7 ' 8世紀頃の南夷の古い国である。夜郎は漢代の初め、BC 2, 3世紀ごろ興った大国である。この国は前漢の武帝に統治されたが、その領土は今の貴州全省、雲南東部、廣西省北部、湖南省の大部、四川省南部にわたる地域であり、夷民の数は15万に及んでいた。その後5, 6世紀に至って彼等は北上し、蜀の地に侵入したのである。しかし第6世紀後半に、周の武帝の圧僚政策により多くの僚人は華人の奴隸となった。そのため隋唐の時代には僚人は次第に漢化され、衣服、住居、言語は華人と区別出来ないほどになったが、それでもなお旧来の習俗はかなり保持されてい

* The custom of teeth extraction in Da Ya Keh Lao

** ICHIRO TODE

た。唐，段成式の酉陽雜俎²¹⁾に

獠在牂牁，其婦人七月生子，死則豎埋之
とある。

宋代には樂史の太平寰宇記²²⁾に

獠婦人娠七月而産，産畢置兒向水中，浮者取
養，沈者棄之，千百無一沈者，長則拔去上齒如狗
牙，各以為華飾，今有四牙長於諸牙而唇高者，別
是一種，能食人，無長齒者不能食，俗信妖巫，擊
銅鼓以祈禱

とある。その他「鑿齒穿耳」や「葬之岩穴」の
句もある。

唐宋の時代には僚の名は，葛僚，佶僚，僞僚，
伋僚等の別名が表れる。

宋の朱輔の溪蛮叢笑にはじめて伋佬の名が表れ
るが，前記の葛，僞，佶は音は伋に近い。葛僚，
佶僚，僞僚，伋僚は皆同音異写で伋佬と同義であ
ろう。

元史には僚を秃刺蛮或は土老蛮と称している。
また，マルコ・ポーロ遊記の中でこの地方への旅
行記に，当地の住民を Coloman (Henry Yule)²³⁾
或は Tholoman (Charignon²⁴⁾, Frampton²⁵⁾) と
記しているが，Tholoman は秃刺蛮・土僚蛮，土
老蛮の音に近く，Coloman は伋佬蛮の音に近い。
マルコ・ポーロ遊記中，同一民族の名称に Tho-
loman と Coloman の二通りの伝書があることは
，当時，どちらともとれる音の呼称があったこと
を示唆するものである。

元，周致中の異域志²⁶⁾に

獠在牂牁，其婦人也七月生子，死則棺埋之，有
打牙者謂打牙僞獠，種類最多不可以人事處張獮難
服

とある。打牙僞獠は後の打牙伋佬と同一部族で
あろう。

明代になると田汝成の災徼紀聞に

玃猪一曰玃獠

とあり，羅日嬰の咸賓録²⁷⁾に

玃猪一名玃僞

とある。

清代には，大清一統志²⁸⁾に

玃猪一名玃僞

とある。

大清一統志²⁸⁾，田雯の黔書²⁹⁾，隆次雲の峒谿織
志³⁰⁾等には伋僚の記述があり，檀華の滇海虞衡
志⁴¹⁾，曹樹翹の滇南雜志³²⁾等には土僚の記述があ
る。これらの記述はいずれも宋，元，明の時代の諸
書にある記述を受けついだものである。

13世紀以後の僚は殆ど土僚及び伋佬の名で表れ
る。

僚及び伋佬に関する上述の記述を要約すれば，
隋以前には僚と称し，唐より宋までは僚，或は葛
僚，僞僚，佶僚，伋僚或は伋佬と称したが，宋元
時には佶僚，伋佬，土老蛮或は秃刺蛮等の称があ
り，明清時には僚の名はなお存在していたとはい
え，殆ど伋佬又は土僚と称されている。

僚の古音は周法高³³⁾によれば lau, traw, tau,
leau 等で，薰同龢³³⁾によれば tlog である。こ
のような複輔音は現在では失われている。葛，
僞，佶，伋の文字は一音の異写であり，複輔音の
前の一音素を代表する字である。現代における伋
佬の自称は Beauclair⁴¹⁾ によれば glao であるとい
う。gl は kl に近似し，苗語では kl と tl は
聞きわけられないほど酷似している。古代の僚が
前述のような変遷を経て伋佬或は土僚と記述され
るようになったのはこのような音韻上の理由によ
るものであろう。

Beauclair 夫人によれば，僚及び伋佬の古来の
風俗中特異なものは次のとおりである。

1. 鼻飲
2. 穿耳
3. 新生兒を水中に置く
4. 打牙

これらの風習は必ずしも僚や伋佬のみに限られ
たものではないが，古来彼等の習俗として屢々記
述されていることである。

1. 鼻飲

魏書¹⁶⁾卷一〇一及び北史¹⁷⁾卷九五の僚伝に僚の
風俗を記している。

其口嚼食，並，鼻飲

宋，朱輔の溪蛮叢笑⁸⁾に

玃猪飲不以口而以鼻，名曰鼻飲

とある。また明の鄭露の赤雅³⁴⁾に

與之酒，鼻酒輒盡

とある。

2. 穿耳

新唐書³⁵⁾卷二二下, 南蛮伝下記, 南平僚伝に
竹筒三寸穿其耳, 貴者飾以珠璫

とあり, 溪蛮叢笑⁸⁾には仡佬の俗として

猓猪妻女……以竹圍五寸長三寸裏錫穿之兩耳名
筒環

とある。

3. 新生兒を水中に置く

博物志¹²⁾の異俗の條に

婦人妊娠七月而産, 臨水生兒, 便置水中, 浮則
取養之, 沈便棄之, 然千百多浮

とある。また皇清職貢図³⁶⁾の土僚の風俗のところに

生子置水中, 浮則養之, 沈則棄之, 今俗亦漸革
矣

とある。また宋, 樂史の太平寰宇記²²⁾に

同邛州邛雅之夷, 獠婦人娠七月而産, 産畢置兒
向水中, 浮者取養, 沈者棄之, 千百無一沈者

とある。

この習俗は新しい生子が祖霊の意にかなうものであるかどうか, 神意の検証として行われる水占(みなうら)であろう。

4. 打牙

僚に関する打牙については, 博物志¹²⁾, 新唐書³⁵⁾, 異域志²⁶⁾に見え, 仡佬に関しては溪蛮叢笑⁸⁾をはじめ数篇の書にあらわれる。博物志の異俗の條に

既長皆拔去上齒牙一以為身飾

とある。

僚に於ける打牙の意義は必ずしも明かでないが, 清代になると欠歯は仡佬中の打牙仡佬の風俗として記述され, 欠歯の意義については婚姻や葬儀に伴う風習とされている。各書の欠歯に関する記述については後にまとめて述べることにする。

上述のように, 僚と仡佬は文献からも, 音韻からも, また風俗上からも同一民族であると考えられる。即ち, 漢魏, 兩晉, 六朝期には僚。唐宋の時代には葛僚, 僞僚, 佶僚, 仡僚, 仡佬。元代には土僚, 秃刺或は土老と呼ばれ, 明以後は仡佬或は土僚と呼ばれて今日に至っている。なお, 獠,

猓猪等の古字はけもの偏になっているが, 1940年に国民政府は改正西南少数民族命名表を公布してこれを改め, 民族名は僚, 猓猪のようにすべて人偏とした。

仡佬の分類

元, 周致中の異域志²¹⁾には, 僚人には部族が多いことを述べ, 打牙の風習を持つ部族を打牙仡佬と称するといっているが, 仡佬の分類をはっきり述べたのは炎徼紀聞⁹⁾が最初である。それによると仡佬には花仡佬, 紅仡佬, 打牙仡佬, 剪頭仡佬, 猪屎仡佬の別があるとしている。田雯の黔書²⁹⁾は, 花, 紅, 打牙, 剪頭, 猪屎の5部族に分類し, 貴州通志³⁷⁾にはそのほか, 鍋圈, 披袍, 水の各仡佬と仡兜を加えている。清, 季宗昉の黔記には更に土仡佬があり, 清, 羅繞典の黔南職方紀略³⁹⁾には青仡佬と打鉄仡佬がある。

これを要約すれば, 現在までに文献に表れた仡佬の部族は, 花仡佬, 紅仡佬, 打牙仡佬, 剪頭仡佬, 猪屎仡佬, 鍋圈仡佬, 披袍仡佬, 水仡佬, 土仡佬, 青仡佬打鉄仡佬及び仡兜の10余種である。これらの仡佬はもと四川, 貴州, 雲南, 広西, 湖南にいたが, 現在は貴州と雲南北西部の山中に住んでいる。そのうち打牙仡佬は貴州省普定に住んでいる¹¹⁾。

欠歯の風習

仡佬における欠歯の風習は古代からあったと思われる。晉の張華の博物志¹²⁾に

荊州極西南界至蜀諸民曰獠子……既長皆拔去上齒牙各一以為身飾

とある。欠歯の風習は晉代には既に存在していたのである。

宋の樂史の太平寰宇記²²⁾に

獠婦人……長則拔去上齒如狗牙各以為華飾

とある。同書には僚と近い関係にあった鳥澁族の風習として

聘女既嫁便欽去前一齒

と記し, 欠歯の風習は僚のほかにもあったことを述べている。

元の周致中の異域志²⁶⁾に

獠……有打牙者謂打牙僞獠

とある。また元の季京の雲南志略⁴⁰⁾には

土獠蛮……男子及十四五，則左右擊去兩齒然後婚娶

とある。また明の曹学佺の蜀中広記⁴¹⁾，卷三十六邊防記第六，下川南道の條に

土獠蛮……男子及十四五則左右擊去兩齒然後婚娶

とあり，烏蒙軍民府の條には

其人有羅羅夷人土獠三種錯雜而居男子年十四五則擊去左右兩齒乃娶

とある。

上述のように伧佬は僚と呼ばれていた頃から既に欠齒の風習を持っていた。

宋の朱輔の溪蛮叢笑⁸⁾に

筒環犵猪妻女年十五六敲去右邊上一齒……とある。欠齒はここにはじめて伧佬の風俗として表れる。

明の田汝成の炎徼紀聞⁹⁾に

打牙犵猪……父母死則子婦各折其二齒投之棺中云以贈永訣也

とある。ここではじめて打牙伧佬の名称が表れ，欠齒が打牙伧佬の風習として報告されるのである。打牙伧佬の名は大明一統志⁴²⁾にも出てくるところを見ると，明代からこの名が起ったのであ

ろう。

清代になると欠齒は専ら打牙伧佬の風俗として述べられる。清の田雯の黔書²⁹⁾に

打牙伧佬剽悍尤甚女子將嫁必折其二齒恐妨害夫家也

とある。また清の隆次雲の峒谿織志³⁰⁾には

打牙犵猪者父母死子婦各折二齒投棺中

とある。また大清一統志²⁸⁾の卷三百三十貴陽府苗蛮の條，伧佬の項に

其在平伐平遠者，為打牙犵猪剽悍尤甚，父母死，子婦各折其二齒納諸棺中，以為永訣。とあり，同書の卷三百四十大定府の苗蛮の條に

打牙犵猪在平遠州，最剽悍，女子將嫁，必打其二齒，恐妨害夫家，

とある。また貴州通志³⁷⁾には

打牙犵猪……將嫁必先折其二齒恐妨害夫家即所謂鑿齒之民也

とある。また黔南職方紀略³⁹⁾に

打牙犵猪……將嫁必先打其二齒恐妨夫家

とある。これらの諸書のほかに清代には打牙伧佬の欠齒の様を描写した図が「皇清職貢図³⁶⁾」(図1)，「苗繚図冊⁴³⁾」(図2)，「番苗画冊⁴⁴⁾」(図3)，「苗冊⁴⁵⁾」(図4)，にある。これらの画



図1 皇清職貢図より



図 2 苗戀図冊より



図 3 番苗画冊より



図 4 苗冊より

集が写生されたのは恐らく乾隆、嘉慶の時代であろう。このうち「苗戀図冊」と「苗冊」では若い女性がまさに歯を抜かれようとしているところを画き、「番苗画冊」は抜歯を終って術者が去るところを写し、他の二冊は術者の姿のみを描いている。前三冊にはそれぞれ、賛、附説、題詩がある。皇清職貢図では

打牙犵猪……将嫁必先折其二齒恐妨夫家所謂鑿齒之民也

とあり、苗戀図冊では

打牙犵猪在黔西平越女将嫁先折去門牙二齒俗言恐傷夫家又名鑿齒苗

また番苗画冊には

女子将嫁必折去門牙二齒恐妨害夫家所謂鑿齒之民也……

とある。Clarke は “Kweichow and Yün-nan Provinces”⁴⁶⁾ 中に、Ta Ya Keh Lao : At the marriage ceremony the wife knocks out two of

her front teeth. と述べ、また Colquhoun 編集の “Across Chryse”⁴⁷⁾ の Appendix に The women before they are married knock out two of their front teeth, so that they may be harmless in their husbands house. と述べているが、これは前記画集の附説の翻訳である。また Bridgman⁴⁸⁾ も同様の翻訳を発表している。

いずれも女子が結婚に際して夫にたたりをもたらないために2歯を抜くと説明している。

図によれば欠歯の方法は、被術者(女子)を数人で押さえつけ、術者は前に位置して、細い棒をの前歯に当て、棒他端を槌でたたいて歯を抜くのである。

上述のように、打牙犵佬における欠歯の風習は晉代以前からあり、清代まで続いていた。しかし清朝後期には欠歯の風習はなくなったようである。

Beauclair¹¹⁾の報告によれば、夫人が1940、41年に貴州省普定にある打牙犵佬の部落で行った調査によれば、彼等の生活は著しく漢化され、欠歯の風習は既になく、古老の記憶にある伝承では、欠歯はかつて結婚に伴う風習として存在したが、約100年前に廃止されたという。欠歯の風習について結婚よりほかの解釈については何も記憶されていなかった。

欠歯の意義については、筆者は前の論文⁴⁹⁾で既に考察を述べたように、古代に結婚や父母の死に際して精霊や父祖の霊のたたりを防ぐ目的でなされた行為であるが、時代の変遷とともに本来の意義が忘れられ、後代には美容のため、或は意味の分らぬまま単なる習慣として行われることもあつ

たものと考える。

結 語

打牙伧佬に於ける欠歯の風習について文献により調査を行った。その結果は次のとおりである。

打牙伧佬は伧佬の一部族であり、伧佬は晉代から四川省南部、雲南省東部、貴州全省、湖南省西部に住み、僚と呼ばれた民族の子孫である。打牙伧佬は伧佬の一部族で現在は貴州省普定に住んでいる。打牙伧佬の名が表れるのは明代以後で、その名が示すように欠歯の風習を持っていた。この風習は伧佬が僚と呼ばれたころのはじめ、晉代には既にあり、近代まで続いたが、19世紀半ばごろにはすたれ、現在打牙伧〇に欠歯の風習はない。欠歯は主として結婚や父母の葬儀に伴う行為として存在した風習である。

稿を終るに臨み、貴重な文献を御下与下さった元九大教授金関丈夫先生に深甚の謝意を表します。また、文献蒐集に御援助を賜った京都産業大学教授川口晃先生に対し厚く御礼申し上げます。また、長年にわたり中国学および東洋医学を御教授下さった恩師岡部素道先生に心から御礼申し上げます。

文 献

- 1) 三宅宗悦：遼東博墓人骨の抜歯例。人類学雑誌，46(6)：207，1931。
- 2) 金関丈夫，宮内悦蔵：満洲国奉天行路屍ニ於ケル抜歯例ニ就テ。台湾医学雑誌，37(7)：1184，1938。
- 3) 金関丈夫：古代支那の抜歯風習に就いて。台北帝国大学新聞，1944，6，6。
- 4) 金関丈夫：古代支那の抜歯風習に就いて。福岡医学雑誌，41(11)：874，1950。
- 5) 金関丈夫：中国古代人に於ける抜歯例骨。解剖学雑誌，26(2)：104，1951。
- 6) Kanaseki, T.: The custom of teeth extraction in ancient China. extrait des Actes du VI^e Congrès International des Sciences Anthropologiques et Ethnologiques, Paris, 1960.
- 7) 顔 閏：大汶口新石器時代人骨の研究報告，考古学報，37：91，北京，1972。
- 8) 宋朱輔，明陶宗儀編：溪蠻叢笑，清順治刊。
- 9) 明田汝成：炎徼紀聞（卷四）
- 10) 芮 逸夫：中国民族及其文化論稿，藝文印書館，

台北，1972。

- 11) Beauclair, Inez de.: The Keh Lao of Kweichow and their History according to the Chinese records. Studia Serica. vol 5, 1946.
- 12) 晉張華撰，周日用等注博物志，朝鮮刊。
- 13) 晉常璩撰，顧廣圻校：華陽国志，商務印書館，北京，1958。
- 14) 後魏鄧道元撰，清王先謙校：水經注，清 光緒一八。
- 15) 唐太宗：晉書，上海，1934，（百衲本二十四史）
- 16) 北齊魏收奉勅撰：魏書，上海，1934。（百衲本二十四史）
- 17) 唐李延壽：北史，上海，1935，（百衲本二十四史）
- 18) 唐杜佑纂：通典〔御製重刻通典〕，光緒二九年。
- 19) 明陶宗儀編：桂海虞衡志，清 順治刊。
- 20) 宋李昉等奉勅編，清張海鵬校：太平御覽，清嘉慶一四。
- 21) 唐段成式撰，明王晉訂：酉陽雜俎，汲古閣本，明刊。
- 22) 宋樂史撰，清陳蘭森等校補：太平寰宇記，清嘉慶八重刊。
- 23) Yule, H.: The book of Ser Marco Polo. London, 1871.
- 24) Charignon, A.J.H.: Le livre de Marco Polo. Peking, 1924~26.
- 25) Frampton, J.: The most noble and famous travels of Marco Polo. London 1929.
- 26) 元周致中：異域志，（夷門廣牘本），上海民国二九。
- 27) 明羅日鑿：咸賓錄，（豫章叢書本），南昌民国四一至一〇。
- 28) 清乾隆中勅編：大清一統志，清光緒二七。
- 29) 清田雯：黔書，清光緒一五。
- 30) 清陸次雲：峒谿織志，清刊本。
- 31) 清檀華：滇海虞衡志，（問影樓輿地叢書），清光緒三四。
- 32) 清曹樹翹：滇南雜誌，清末刊。
- 33) 同法高：漢字古今音彙，香港中文大學出版，1973。
- 34) 明鄭露：赤雅，（知不足齋叢書本），清刊。
- 35) 宋歐陽修等奉勅撰：新唐書，明萬曆二三（北監本）。
- 36) 清傅恆奉勅編：皇清職貢圖，清乾隆刊。
- 37) 清閻興邦重修：貴州通志，康熙三六序。
- 38) 清李宗昉：黔記，清光緒一五。
- 39) 清羅繞典：黔南職方紀略，道光二七修，光緒三一補刊。
- 40) 元李京：雲南志略，（說郛第六二），明末清初

- 刊。
- 41) 明曹学佺：蜀中廣記，（四庫全書珍本初集），南京，民国二三，二四。
- 42) 明李賢等奉勅編：大明一統志，明天順五。（宮刊大字本）
- 43) 苗繇図冊，中央研究院歷史語言研究所，台北，1973。
- 44) 番苗画冊，中央研究院歷史語言研究所，台北，1973。
- 45) 苗冊，清王鈞題画，写本，東洋文庫藏。
- 46) Clarke, R.G.W.: Kweichow and Yunnan Provinces. Shanghai, 1894.
- 47) Colquhoun, A.R.: Across Chryse. Vol II Appendix, Translation of a manuscript account of the Kwei-chou Miao-tzū. London, 1883.
- 48) Bridgman, D.D.: Sketches of the Miao-tsze. J. North-China branch of the Royal Asiatic Society. No. 3, Dec. 1859. Shanghai.
- 49) 戸出一郎：中国における欠齒の風習について，齒医史，5(1)：1977。